等を検討する資料としての荷物実績調査を国鉄で隔年1回実施しているが，この調査による輸送距離は前表のとおりである。

なお，旅客の1人平均乗車キロ，貨物の1t平均輸送キロ等は年間を通じて算出されているが，手小荷物の1個平均輸送キロは臨時の調査以外は常時算出されていない。(太田　寿)

いっしゃふたくちあつかい　1車2口扱　この制度は，ひっ迫せる小形貨車の需給関係を緩和するためとくにとられた臨時的措置で，昭和27・12日本国有鉄道公示第409号で定められた「15トン積貨車の特殊取扱方」による取扱をこのように呼んでいる。

車扱貨物は原則として1車に1口の貨物しか積載できないことになっているが，この取扱をする貨物については，15t積貨車1車に異なる2口の車扱貨物を同時に積載し運送することができ，これにはつぎのような条件が付されている。

1　適用品目　(1)　2口の貨物は，貨物等級表上減トンの定めのないものまたは2口共減トン数を同じくするものにかぎる。

なお，危険品(火薬類を除く)にあっては同一品名のものにかぎる。(2)　2口の貨物は，それぞれ荷造が均一で重量がおおむね平均し，実重量の算定が容易なものにかぎる。ただし特種品，火薬類，小口混載貨物，容器を用いない家畜およびバラ積となるものはこの条件に合わなくともよい。

2　着駅の制限　(1)　1駅発で1駅着または2駅着のものにかぎる。ただし東京都区内ならびに同一市内の2駅を第1着駅および第2着駅とするものは取扱わない。(2)　第1着駅と第2着駅間のキロ程は250km以内とする。(3)　第1着駅において専用線入りとなるものは取扱わない。

3　荷送人　2口の貨物の荷送人は，同一であること。

4　運賃計算トン数　貨物の実重量によるが1口ごとに最低を6t(1方が10t以上のときは他方は5t)とする。(重森直樹)

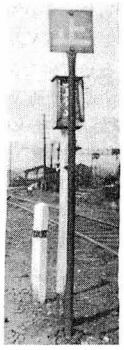
いっしゃへいきんせきさいトンすう　1車平均積載トン数　全国またはある地域について，貨物発送トン数を使用車で除したトン数。したがって大形貨車の使用が多い場合は，平均積載トン数は高くなり，反対に小形貨車が多くなればそのトン数は低くなる。しかし貨物発送トン数は運賃計算トン数を計上しているので，車種の割合のみでなく，積載量または積載方のいかんによっても1車平均積載トン数に影響する。

1車平均積載トン数の変化を年間を通じて見ると10～12月の繁忙期には高くなる傾向があり，6～8月の閑散期には低下する。また長期間についてみると，原材料の多く輸送される戦時には一般にいちじるしく高上し，平時には低下するのが通例である。地域的には石炭車(セキ)長物車(チキ)等の大形貨車を使用することが比較的多い北海道がもっとも高い。(加藤礼三)

いっせんあつかい　1線扱　停車場で上り列車，下り列車の着発線路がある場合，いずれか一方の線路のみを指定して上下列車を扱うことをいう。

通常，停車場では上り列車の進入する線路と下り列車の進入する線路とを区別しているが，列車の行違をしない停車場では，上り列車でも下り列車でも，別段進入する線路を上り，下り別々にしなくても支障がないので，このようなところは1本の線路を上下列車の着発に使用し1線扱としているものがある。(三和達忠)

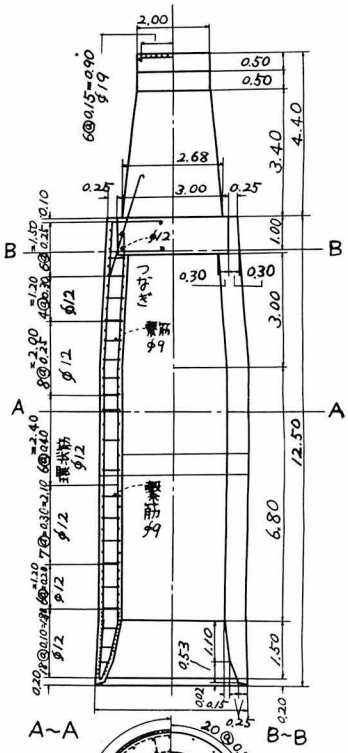
いったんていしひょう　一旦停止標　車両の一旦停止を必要とする箇所に設ける。車両入換，機関車の入出庫等で，操車掛または誘導掛が常に進路の構成を信号掛と打合わせをする箇所とか，誘導者が交代する箇所とかまたは前方の車止までの距離が短くなっている箇所に設け，この標の外方に入換車両を必ず一旦停止させるために設けるものである。(三和達忠)



一旦停止標

いづつ　井筒　橋台，橋脚などの基礎工の1つ。矩(く)形，丸形または楕(だ)円形，地下に埋込む内空柱状で，ちょうど井戸枠(わく)のようなもので，ウエル(well)ともいう。井筒は古くはれんが造であったが，最近のものはコンクリートまたは鉄筋コンクリートでできており，形は上記のものが多いがそのほかにも小判形，矩形の四隅を落したような八角形など各種ある。

1. 井筒の設計



用途は橋台，橋脚基礎として用いられる場合がいちばん多いが，そのほか岸壁，護岸擁壁，高層建築物など，重要建造物の基礎に多く用いられる。

1　設計図-1は橋脚に用いられた鉄筋コンクリート円形井筒の一例であるが，最下端には沈下していく場合に地盤を切開いていく刃口がある。刃口は図-1のように沈下の抵抗を少なくするためにと，支持面積を増大するために多少外へ開かせる場合が多い。中には開いていないものもある。また沈下していく途中の地質が砂利層であるとか，玉石が出るとか，あるいはそのような理由によって発破を用いなければならないようなところには，刃口の保護の意味で鉄沓(てつくつ)をはかせたものもある。いずれにしても沈下の抵抗も大きく，沈下中何が出てくるかも事前には，はっきり予想されないので，発破をかける必要のあることも予想して鉄筋の配置も刃口部分には密にしている。さらにその上部の軀体部分については，上部からの垂直ならびに水平荷重と土圧，水圧，浮力，地震力などを考慮して設計計算を行うが，小断面のものでは計算上鉄筋の必要ないことが多いが，用心のため少量配筋したものもある。無筋のものもかなりあるが，掘削沈下中の施工上の不備から2次的応力を生じ亀裂(きれつ)を生じた例もあるので，地質によっては少量鉄筋を入れた方が安全である。壁厚は60～80cmである。図-1の例は上